

Ⅳ 第4回カツオ・マグロ漁業に 関する研究座談会

共 催 水産海洋研究会
三崎遠洋漁業技術研究会

日 時 昭和40年8月9日午後1時～5時

場 所 神奈川県水産試験場

話題および話題提供者

F. A. O. の大西洋マグロ会議について

三村 浩哉（水産庁研究一課）

日本カツオ・マグロ漁業の大勢

田村 竜彦（日本カツオ・マグロ漁業連合会）

オ二層層とマグロ漁場

井上 元男（東海大学水産研究所）

世界的に見たマグロ漁業と海洋学の情報

宇田 道隆（東京水産大学）

リール式マグロ延縄操業試験

下崎 吉矩（東海区水産研究所）

（要旨は三崎遠洋漁業技術研究会報第7回例会報告、昭和40年8月を参照し、宇田道隆が自分のメモに基いてまとめた。）

1 F. A. O. 大西洋マグロ会議について

三村 浩 哉 （水産庁研究一課）

1965年7月6～13日ローマのF. A. O. 本部で「大西洋マグロ漁業資源の合理的利用」のためのオ2回作業部会が開かれたのに出席した。経緯をのべると事の起りは古いが、日本のマグロ漁業がだんだん大西洋に進出してアフリカ沿岸諸国のマグロ漁に対する関心が大へん強まり、話し合う場を持ち、^{*}「大西洋のマグロ資源を保存するために何らかの措置をとらねばならないだろう。そのためには国際的な委員会をつくれ。」という勧告がF. A. O. により1961年4月に出された。1962年7月2～4日米国ラホヤで開かれた「世界マグロ族研究会議の決議にも出た。その結果1963年10月25～30日ローマでオ1回の前記作業部会（FAO Working Party For Rational Utilization of Tuna Resources in the Atlantic Ocean）会議が開かれ、高芝（水産庁）、溝口（日経連）両氏が出席し、こゝでオ2回会議が開かれたわけである。参加国はF. A. O. が中心となつて大西洋から常時かなりの量のマグロを漁獲している国を主体としその他若干の沿岸国を含めるとし、作業部会メンバーには、ブラジル、フランス、ナイゼリア、日本、ポルトガル、スペイン、米国、トルコ他9カ国

*註：1960年12月12～17日「サワラ以南アフリカ技術協力委員会」（CCTA）マグロ族シンポジウム（セネガル国ダカール）での決議から1961年2月3～11日CCTAオ16次会議（ナイゼリア国ラゴス）決議。国連に提出。